

<報告・記録>

# 日本語教師の態度と学習者の成長

—— コメニウス教育思想との往還 ——

白石 真理

Mari Shiraishi  
東亜大学留学生別科  
yamasaki55@toua-u.ac.jp

## 《要 旨》

本稿は、日本語教師の「態度」が学習者の成長に与える影響を教育思想家コメニウスの理念に照らして考察する記録的報告である。留学生 A の事例を通じ、制度化が進む日本語教育において、教師のまなざしが学習者の主体性を支える重要性を示し、教育思想と教育実践の往還の意義を論じる。

キーワード：日本語教師，コメニウス，教師の態度，学習者の成長，日本語教育の参照枠，主体性，共生社会

## 1. はじめに

本稿では、日本語教師の「態度」が学習者の成長にどのように関与するのかを問い直す。その際、17世紀の教育思想家ヤン・アモス・コメニウスの理念、とりわけ「大教授学」を手がかりとする。「大教授学」は、当時一部の人だけのものであった教育を「すべての人が学べる教育の仕組み」として体系的にまとめた教育書といえ、現代の制度的枠組みの中で見落とされがちな教育の根源的な意味を照らし出すものである。

教師の態度とは何か。学習者の成長とはどのような過程を指すのか。そして、制度と思想のはざままで、教師はいかにして「教育する者」としての在り方を模索できるのか。本稿ではこれらの問いに対し、教育思想と現場実践の往還を通じて考察を試みる。

近年、日本語教育の制度化が進む中で、「登録日本語教員制度」が導入され、教師の資格や研修の標準化が図られている。とりわけ、令和

元年6月28日に公布・施行された「日本語教育の推進に関する法律」（令和元年法律第48号）では、第1条において、「多様な文化を尊重した活力ある共生社会の実現に資するとともに、諸外国との交流の促進並びに友好関係の維持及び発展に寄与すること」が目的に掲げられた。日本語教師にとっては文化審議会国語分科会令和3年10月12日に取りまとめられた「日本語教育の参照枠」（以下、「参照枠」と略記）が教育現場の指針として機能する一方で、新たな対応が求められる側面があると捉えられている。

このような動きは、教育の質保証や専門性の向上という点で重要な意義を持つ一方で、現場レベルでは教師の「態度」やまなざしといった、制度では捉えきれない側面が見えにくくなっているのではないかという教師間の懸念もある。

### 1.1 「日本語教育の参照枠」と教師の意識

前述の「参照枠」が目指すものとして、次の点が掲げられている（文化審議会国語分科会

2021)。一つ目は国内外における日本語教育の質の向上を通じた共生社会実現への寄与、二つ目は言語・文化の相互理解・相互尊重を前提とし、日本語教育関係者すべてが参照する枠組みとすること、三つ目は学習・教育の内容や方法の画一化を図るものではないことである。加えて、世界の多様化に伴う、日本語学習者自身の習熟度の客観的把握や自律学習のための指標を提示することなども盛り込まれている。また、多文化共生社会に向けて、外国人と接する一般の日本人にも「日本語教育の参照枠」の内容を分かりやすく示し、外国人の日本語能力について理解を深めることも重要であると述べている。これらは本報告において、共生社会への寄与とコメニウスが理想とした平和的な社会の実現という点で共通する。

さらに、「参照枠」は言語教育観の柱として以下の三点を示す。

1. 日本語学習者を社会的存在として捉える：学習者は、単に「言語を学ぶ者」ではなく、「新たに学んだ言語を用いて社会に参加し、より良い人生を歩もうとする社会的存在」である。言語の習得は、それ自体が目的ではなく、より深く社会に参加し、より多くの場面で自分らしさを発揮できるようになるための手段である。
2. 言語を使って「できること」に注目する：社会の中で日本語学習者が自身の言語能力をより生かしていくために、言語知識を持っていることよりも、その知識を使って何ができるかに注目する。
3. 多様な日本語使用を尊重する：各人にとって必要な言語活動が何か、その活動をどの程度遂行できることが必要か等、目標設定を個別に行うことを重視する。母語話者が使用する日本語の在り方を必ずしも学ぶべき規範、最終的なゴールとはしない。(文化審議会国語分科会 2021)

それらの実現のためには、オーディオリンガルメソッドでの口頭ドリル重視の練習や、教師が設定するテキストの学習目標を達成させよう

とするような教授方法や学習者への態度を教師が見直して思考の転換をしなければ、「参照枠」の掲げる三本の柱に沿うことはもちろん、日本での留学生活に耐えうる日本語能力や精神力の成長は見込めない可能性が高い。その理由として、従来の文法積み上げ式の教え方では言語知識を重視してしまうこと、学習者の個別の目標を重視するならば、たとえコミュニカティブアプローチであったとしても、教師がクラスの学習者全体に一齐に同じことをさせる意義が問われてしまうことである。その回避のために、教師の従来の思考や態度の見直しは重要である。

## 1.2 コメニウスの思想を参照する理由

ヤン・アモス・コメニウス（以下コメニウス）は17世紀の教育思想家であり、世界初の絵入り教科書「世界図絵」や万人にすべてのことを普遍的に教える「大教授学」を示したことで知られる。また、教育によって平和を求めた思想家でもあった。相馬（2014, p9）によると、「大教授学」は1632年にチェコ語で著された「教授学」をラテン語訳したものであり、教育実践に適用される普遍性が認められ、19世紀後半以降、学校教育の普及が推進される中でコメニウスの主著とみなされるようになった。本稿においては先行研究を踏まえつつ、日本語教育実践の視点から限定的に検討する。日本語教育に共通する部分としては、コメニウスが言語教師でもあった点や、万人教育が外国人や障害のある人、年齢の異なる人など多様な学習者を包括する点、文法や語彙の順序を自然な習得プロセスに合わせるといった言語教育の視点が認められる。また、教育によって平和を目指すコメニウスの根本的な思想は、現代社会が触れる「共生社会」の構築すなわち言語教育を通じた平和な社会の実現と共鳴する。

日本語教育において、とりわけ現代の課題解決型アプローチに言及する際、アメリカのプラグマティズムを牽引したとされる思想家ジョン・デューイの名が挙げられ、アクティブラーニングや市民教育といったテーマで参照されることがある。しかし、同様の教育理念を掲げる語学教師としてのコメニウスは「語学の習得に一

定の語彙と練習を通じた暗記の必要性、形の習得の意義を熟知し、事実界での段階を追った積み重ねの大切さを依然として強調」する（松岡 2002, pp.93-106）。また、最終的に獲得されるべき知識や技能を一つの全体と見なした場合、コメニウスは、部分から全体を目指す総合的アプローチと、経験から一般へと向かう分析的アプローチを採っており、それらが事実と理念の上で反対も交差もしていた。したがって、現代に生きる語学教育者は、そのことを十分に意識しておく必要がある（松岡 2002, pp.93-106）。

総じて、コメニウスは平易な事項から難度の高いものへと段階的な学習すなわち文法主義的な学習を良しとしながらも現実的な学びの重要性に対しても柔軟であったと解釈できる。デューイの思想と同様に、コメニウスの思想は体系的・制度的な面を尊重しつつ、実用的で現実的な活動や教材を取り入れる真正性のある教育の価値を現代の日本語教師に示しているのである。上記から、教師の「日本語学習者としての留学生」への態度やまなざしは注目されがちなデューイの教育思想だけでなく、コメニウスの教育思想に照らし再考する意義が十分にあるといえる。

## 2. 実践の概要

本報告は、筆者が出会った留学生 A に対する約 1 年間の教育実践の記述的事例研究であり、授業観察記録、模擬試験の結果、および授業の参加状況を分析資料としている。なお本報告では、対象者が特定されないよう十分に配慮した。A はネパール出身の 22 歳の男性で、アルバイトをしながら勉強することを前提に日本へ来日した。アルバイト先は、荷物の運搬を中心とした配送作業である。

留学生が来日するにあたっては、経費支弁能力と覚悟を要する。その覚悟には、来日後に日本語能力を向上させる努力が含まれ、留学生自身の日本語学習に対する意欲の有無や学習の実践が求められている。同時に、日本における生活能力も厳しく求められ、とりわけ経済的に困難な地域から来日した場合には、自律の維持に

も多くの困難を伴う。

## 3. 学習者の成長の記録と教師の態度

次頁の表 1 は、来日後から当該日本語教育機関を卒業するまでの留学生 A の様子を示したものである。留学生 A の様子を認めたくえて、当時の筆者が教師の立場で抱えた思いを簡易的なメモをもとにまとめ記した。そのうえで、アメリカの教育心理学者 J. M. ケラー (John M. Keller) が提唱した「学習意欲を高めるための動機づけモデル (ARCS モデル)」に沿って、注意 (Attention)、関連性 (Relevance)、自信 (Confidence)、満足感 (Satisfaction) の 4 要素を、留学生 A との関わりに対応させ示した (表 1)。

### 3.1 留学生 A の様子と ARCS モデル項目の対応

ARCS モデルは、学習者の意欲を高め、成果につなげる授業設計を行うことを目的とし 1980 年代に教育工学において提案されたものである。学習体験が全体として肯定的な印象を与えるためには、いくつかの条件が満たされなければならない (ケラー 2010, p.200)。それらの条件は学習者の期待感に関連するが、なかでも内発的動機付けは学習者が満足感を得るにあたって最も重要な要素である。つまり、学習者の満足感が高くなるのは、学んだことについて個人的に意義深いと感じ、求めていたレベルを達成したと感じるときなのである。留学生 A との教授活動でも筆者は学生の内発的動機付けを心掛けていた。しかし、表 1 は 5 月から 8 月にかけて学習者の動機付けが不十分であったことを示すのである。

この時期、同級生の成績が上昇したのに対し、A にだけ学習意欲の低下が顕著に見られた。当時、A は今後の進路として日本語能力試験 (JLPT) N3 レベルを要件とする進学先を選択していた。しかしそれは A の日本語能力を超えており、教員の中には、その進路を希望した A の学力向上と学習意欲上昇を諦める声もあった。A 当人も教員の雰囲気を感じ、

表 1.1 留学生 A の成長 (ARCS モデルによる区分)

	主な日本語学習 関連項目	様子から推測できた Aの状態	教師の思い	意識的に行ったARCS モデル項目
10月	来日 ひらが な・カタ カナ学習	アルバイトが見つからない 不安	1.5年で卒業するため短期集中で日本 語能力を確実に獲得させたい、Aのア ルバイトが早く見付き安心して生活 できるようにしたい	A : Attention (注意)
11月	メインテ キスト学 習 アル バイト開 始	短期アルバイト (肉体労 働、深夜) での疲労	無理をしても初中級レベルの学習を 6か月で終了させたい、アルバイトで の苦労は留学生なら仕方がない、目標 達成のために妥協はさせない	
12月	冬休み	アルバイトの疲労と短期ア ルバイトが継続雇用になる かの不安	速い進捗についてくる学生たちなら、 卒業前にJLPTN3がとれるはず、Aの頑 張りなら成功が期待できる	
1月	メインテ キスト学 習	授業進度に伴う宿題量への 疲労と睡眠不足	授業進度に不満がある学生が見受けら れるが理解してもらいたい、進捗現状 維持、AならN3に合格できる	
2月	定期試験 結果	はじめての定期試験への緊 張、成績下位への不安	授業進度に不満がある学生が見受けら れるが理解してもらいたい、進捗現状 維持	
3月	春休み	アルバイトの疲労と新学年 クラス編成への不安	10月期生が十分頑張ってくれた、新年 度もさらに学習が深められる、高い能 力を秘めていると期待できる、Aには 新年度の発表会の代表スピーチをさせ たい	C : Confidence (自 信)
4月	メインテ キスト学 習	新クラスへの期待と不安、 クラス発表会での代表ス ピーチ	10月期生が4月期生と馴染んでくれる か心配もあるが、積極的に学習に取り 組んでほしい、Aなら新クラスで他の 学生より早く新クラスメイトとコミュ ニケーションを開始できるはず	C : Confidence (自 信)
5月	メインテ キスト学 習	新クラスでの自信低下 (JLPTN4取得済みのクラ スメイト多数)	4月期生への学習態度に不満もある、 10月期生の意欲と能力を信頼したい	
6月	JLPT校内 模擬試験	N3合格圏外という事実へ の不安と自信低下	Aの不安が見えるが、必ず卒業前にN3 合格できる	

表 1.2 留学生 A の成長 (ARCS モデルによる区分)

	主な日本語学習関連項目	様子から推測できた A の状態	教師の思い	意識的に行った ARCSモデル項目
7月	第1回日本語能力試験 (JLPT) N3不合格	受験への不安と自信低下	現時点での不合格は問題がない、成功体験への一歩に過ぎない、Aなら次回のJLPTでN3に合格できる	
8月	夏休み	アルバイトの疲労と自信喪失	夏休み中に見えない努力をしたはずのAなら諦めずにJLPTの勉強を継続するだろう	
9月	定期試験結果	アルバイトの疲労と自信喪失から授業中の居眠りや参加態度の悪化	クラスでの自信なさげな態度を指摘する教師もいるが、スランプに陥っただけで必ず自信を持ち直すはず、10月のイベントで代表スピーチを任せたい	C : Confidence (自信)
10月	JLPT校内模擬試験	模試N3合格圏外の連続、イベントでの活躍	2学年合同の校内イベントでAに日本語スピーチを任せて正解だった、自信回復の一助としてもらいたい	S : Satisfaction (満足感)
11月	JLPT校内模擬試験	模試N3合格からの自信回復、明らかな留学生活への順応 (後輩のサポート等)	Aの不安が見えるが、必ず卒業前にN3合格できる、諦めないで努力できるはず	R : Relevance (関連性)
12月	JLPT受験	自信の完全回復と大学受験成功	Aは期待通り、模擬試験での結果が出せた、安心することなく勉強を継続してほしい	S : Satisfaction (満足感)
1月	第2回日本語能力試験 (JLPT) N3合格	日本語学習、進学、アルバイトへの充実感	自信低下や学習意欲の低下が見られた時期もあったが、入国時からAの潜在能力を信じておくことができてよかった	S : Satisfaction (満足感)
2月	定期試験結果	日本語学習、進学、アルバイトへの充実感	Aや10月期生は日本で留学生活の厳しさも粘り強さも学ぶことができた、今後も日本社会で活躍できる素地が身についたはず	S : Satisfaction (満足感)
3月	卒業	日本語能力、留学生活への自信や喜び	1.5年コースほとんどの学生がN3以上の日本語能力を獲得できたことに安堵	C : Confidence (自信)

進学先を諦めそうに見えた。これに対し、「あなたが合格したいなら、自分のペースでやってみてください。他の人のことは気にしないでいいです。結果がわかるのはテストの後だけです。」と声をかけたところ、180点満点中95点以上が合格点となる本試験前に実施した模擬試験では、初回の10月から11月中旬にかけて合格点に届かなかったものの、本試験直前の11月下旬には103点を得点するほどに成績が伸び、最終的には本試験に合格するに至った。

「肯定的な称賛」(ケラー 2010, p.201)は高い内発的動機付けを持っていない学習者に対するときにも助けとなると考えられ、筆者もAに対し、「難度が高い課題を達成したことに学習者が内発的なプライドが持てるように言語的な強化を提供する」ことを意識した。たとえば3月には、留学生Aに対して、クラスメイト、教師、授業担当外の事務職員など100名以上が参加する母国の新年祝賀イベントの代表スピーチを依頼したことがある。クラス全体に「だれか次のイベントで代表スピーチをしてくださいませんか」と尋ねたところ、希望者は誰もいなかった。しかし、Aだけが一瞬だが微笑んだため、「Aさんのスピーチが聞けたら嬉しいのですが、どうですか」と聞くと、「わかりました、します」と消極的ながらも承諾してくれた。それは、他のだれもやりたがらないなかで、自分だけが肯定的な反応を示せたという「自信の芽生え」であり、春休み後の3月から4月にかけて、C: Confidence (自信)を身につけた場面と理解することができる。

そのため、10月頃に学習意欲が低迷し、一見やる気がないように見えたAに対して、敢えて「またイベントの代表スピーチをお願いしたいです。スピーチと言えばAさんだとみんなが期待しています」と伝えた教師の承認も、成績が伸び悩む不安のなかに置かれたAが自己肯定感や学習意欲を回復することに寄与した可能性がある。大勢の前でミスなく丁寧に実施されたAのスピーチには、出席者から拍手喝采が送られた。そうした成果を生み出した要因は本人の努力に帰せられるが、それと同時に、結果を急かすことなく見守る教師の態度や「肯

定的な称賛」の効果も関連していると思われるのである。

## 4. 考察

### 4.1 コメニウスの思想が現代日本語教育にどう活かされるか

予測不可能といわれる現代において、コメニウスの思想は教育の原点に立ち返り人間にとって不可欠なものを再考する視座を与える。とりわけ、コメニウスの「大教授学」において明示された教師への助言の数々は、義務教育にかぎらず日本語教育においても光となり、日本語教師の態度を決めるものといえる。

そのように検討できる理由は、筆者が関わっている日本語教育の場においても、さまざまな国籍や家庭の学生たちを前に、「自己を献呈し、全力を尽くし、配慮し、見守る者」(アルト 1959)の態度の必要性が示唆されることである。とりわけ、2024年度以降の日本語教育業界の変革により、「主体的に学習に取り組む態度」がさらに重視されるようになった。また、「共生社会の実現」という新たな理想が掲げられている。この変化に伴い、教師が学習目標を設定し、達成させるために指示するような教師主導の立場から主体的に学ぶ学習者を見守る立場へと意識改革が求められている。本稿冒頭で述べた「参照枠」による言語観に示された「日本語学習者を社会的な存在として捉える」という柱は、「あらゆる社会構成員、民族の構成員に生活領域の認識が親しみやすくされるべきだ」(アルト 1959, p.65)とした民主的なコメニウスの思想にも根底で結びついていると考えられる。

新時代において教師の意識改革は容易ではない。しかし、コメニウスのような教育の祖のもとに立ち返ると、教育者も学習者と同様に、学習や行いによって自らが求めるかたちに向かって前進する必要がある。学ぶのは学習者だけでなく、教師自身である。そして、現実的な教育現場の変化に対し柔軟な対応が必要である。

## 4.2 教師の態度が学習者の内面に与える影響

「人間の主体性」という視点にたつ時、「熱心でしなやかな人々が学習に適しており、知恵の食物を与えるだけで自らたくましく育っていく」というコメニウスの表現(1962, p.126)は、人々に焦点を当てその存在を認め、重視し、成長を支援する教育的態度として解釈できる。そこには人間の主体にコメニウスが重きを置いた側面がある。人間の主体性とは、まさに冒頭で述べた「日本語教育の参照枠」においても掲げられた「よりよい人生を歩もうとする社会的存在」である。また、「知ろうとし学ぼうとする炎をなにかの方法で子どもの胸に燃え立たせなくてはならない(コメニウス 1962, pp.174-175)」といったコメニウスのことばに、主体的な教育の必要性が表れている。また、コメニウスの「生徒が喜ぶものを与えるよう努力すれば生徒の魂は喜びに充たされ、それを求め、注意力を備えるようになる(コメニウス 1962, p.219)」という文言からは、「多様な日本語使用を尊重する」すなわち教師側の押し付けや強制ではなく、日本語学習者各自が求め必要とする様々なものを認め、「言語知識を持っていることよりも、その知識を使って何ができるかに注目する。」という「日本語教育の参照枠」が目指す方向性と共通すると考えられる。教師の教育観や関わり方によって、学生の成長が促進または停滞もするのである。

## 5. 今後の課題

「大教授学」の「第12章—学校は、改革して改善できること」の中において、コメニウスは、鳥が空に飛び、魚が水に泳ぎ、獣が走り回るようになるにはどんな強制も不要であり、力に応じてたちまち自ら活動し始めると述べた(コメニウス 1962, p.121)。また、どんなものでも、生まれつき活動能力さえあれば、その力に応じて、わずかな助けがあれば必ず自発的に喜んで活動して行くようになること示している。さらに、人間の知能にとって到底近づけないものがある、ということではなく、学習者が目標を達成できないのは、「階段」のつくり方が間

違っている、壊れている、つまりは教授方法がよくないと指摘する(コメニウス 1962, pp.121-123)。「階段」のつくり方が正しく、危険がなければ、誰もがどんな高いところへでものぼって行けることは疑いないのである(コメニウス 1962, pp.123-124)。この「階段」を教授方法、カリキュラム、教授体系、教育の組織そのものと理解すれば、やはり教育する側の在り方によって、どんなものでも自らが望む目標を目指せるということである。

さらに、コメニウスは、どのような人々にどのような教育が適しているのかの解説において、次のように述べている(コメニウス 1962, pp.127-128)。

「第四は、素直で学問を好みもすれば熱心でもありますが、しかし進みの遅い・鈍な人々です。このような人たちは、先導者のあとをたどることはできます。しかしそれができるには、弱いところを助けてやらなくてはならないのですが、過重な負担を負わせてもなりませんし、きびしい要求をつきつけてもなりません。むしろ、いつもひろい心で大目に見てやり、手をかし、力づけ、頭を上げさせて、気力を失わないようにしてやらなくてはならないのです。申すまでもなく、このような人々が目標にたどりつくのは遅いかも知れませんが、しかし晩生の果実のように長くもちます。なるほど、鉛には刻印はつきにくい。しかし、なかなか消えないのです。同じように、この人たちは多くの場合、豊かな天分の持主よりもねばりがありますし、一たんつかんだものは、容易には失いません。ですから、こうした人たちを学校から遠ざけてはいけないのです。」

そこから明らかなのは、学びが遅々として進まないと思える学生であっても、教師は排除することなく受容する必要があることである。コメニウスのことばには、受容と愛が読み取れ、これを日本語教育に照らすならば、学習成果が上がらないと思われる日本語学習者を対象に、「ひろい心で、手をかし、力づけ、気力を失わ

ないようにする」ことを認識する必要がある。確かに、多くの日本語教育機関の日本語学習者は我が国の学校教育法第一条で定められる学校の児童・生徒とは学習目的や学習に至った背景、家庭環境を異にする。既に母国での義務教育を修了あるいは高等教育を修了した後に日本語学習者として学んでいる者も多い。したがって、人格形成や成長のための細やかな支援は不要だともいえる。しかし、目標言語があり、そのさきに社会の一員として生きるテーマが認められるならば、コメニウスが導いた万人のための普遍的で愛を伴う教育は、大枠で平和的な社会への接続や人間形成を求める点で日本語教育の指針にも共通する。つまり、日本語教師は、コメニウスが理想に掲げた「人間を育てるまなざし」、どんなに弱いものでも受け入れ粘り強く支援する姿勢を示す必要があるのである。

コメニウスの理想に照らすと、留学生 A との教育経験は、授業のスピードが速すぎた等の「階段のつくり方」が正しくなかった点が認められながらも、学習意欲の低下や落ち込みを受容し、最後まで排除しなかった点で一定の教育的意義を有する実践であったと整理できる。訪日外国人の就労・入国そのものを統治する時代から「教育としての統治時代」に変化した現在の日本語教育においては、教師教育が陶冶の面だけで成立しにくい状況が生まれている（南浦他 2025）。こうした変化を踏まえると、現在の日本語教育は教師養成を含む全体の制度再構築が求められると同時に、その制度のもとで行われる学習者の人格的教育についても改めて議論する局面にあるといえる。ここでいう人格的教育とは、教師の態度、学習者を見つめるまなざしから実現されるものである。「参照枠」に依存する検討課題や学習者に提供できるカリキュラムや授業進度などの精査不足が挙げられるものの、本稿において明らかになったのは以下の二点である。

1. 日本語教師の態度やまなざしは、学習者の主体性を支え、制度的評価からは捉えにくい成長（代表スピーチを引き受けたことによる「自信の芽生え」「自己肯定感」や模擬試験による意欲回復など）を支援する重要な要素であることが、留学生 A に対する教師の態度によって顕著に現れた。
1. 「日本語教育の参照枠」のような枠組みは教育の全体の方向性を示し、できることを測ろうとする。一方で、日本語教師の態度やまなざしは学習者を受容し、精神面を支え、学習意欲を育てる。

制度的側面を教師の「態度」が補完することで、日本語学習者が自分らしさを発揮し、社会の一員として生きる存在になるよう導くことがいま求められているのである。

## 6. おわりに

「共生社会」という理想が現実の中で揺らぎを見せるこんにち、「共生社会」の一助となることを求められる日本語教師も、近代教育の祖コメニウスの万人に開かれた教育的思想にヒントを見出し、未来ある学習者の「成長」を育てるまなざしを滋養する時ともいえる。そこには、日本語教育が制度化され、カリキュラムが整備されつつあるなかで、伴走者としての教師であるとともに、人間形成に関わる教育者としての態度を意識することも求められる。

一方で、本稿は一事例に基づく報告であり、得られた示唆を直ちに一般化するには限界がある。今後は、複数事例の蓄積や継続観察を通して、「学習者の成長を支える教師の態度とは何か」をより多角的に検討していく必要がある。引き続き、学習者が主体的に目標言語の学習を通じて豊かな人生を獲得していくために、教育思想と教育実践の往還を重視した日本語教育の在り方を検討していきたい。

---

## 参考文献

- ローベルト・アルト (1959) 『コメニウスの教育学』(江藤恭二 訳) 明治図書出版, 東京.
- ヤン・アモス・コメニウス (1962) 『大教授学第1』(鈴木秀勇 訳) 明治図書出版, 東京.
- ジョン・M. ケラー (2010) 『学習意欲をデザインする: ARCS モデルによるインストラクショナルデザイン』(鈴木克明 監訳) 北大路書房, 京都.
- 松岡弘 (2002) 「コメニウスの言語教授法と言語教科書—日本語教育はそこから何を学ぶことができるか—」『一橋大学留学生センター紀要』5:93-106
- 南浦涼介・瀬尾匡輝・田嶋美砂子 (2025) 「「教育としての統治」時代の日本語教師教育—統治への対応か陶冶への応答か」『日本語教育学会』190:4-18
- ヤン・パトチカ (2014) 『ヤン・パトチカのコメニウス研究—世界を教育の相のもとに—』(相馬伸一 編訳; 宮坂和男・矢田部順二 共訳) 九州大学出版会, 福岡.
- 文化審議会国語分科会 (2021) 「日本語教育の参照枠 報告」, 文化庁.  
[https://www.bunka.go.jp/seisaku/bunkashingikai/kokugo/hokoku/pdf/93736901\\_01.pdf](https://www.bunka.go.jp/seisaku/bunkashingikai/kokugo/hokoku/pdf/93736901_01.pdf), (2025年12月1日閲覧)
- 文部科学省総合教育政策局日本語教育課「日本語教育の推進に関する法律について」, 文部科学省.  
[https://www.mext.go.jp/a\\_menu/nihongo\\_kyoiku/mext\\_00001.html](https://www.mext.go.jp/a_menu/nihongo_kyoiku/mext_00001.html), (2025年12月10日閲覧)

## Japanese Language Teachers' Attitudes and Learners' Growth: Dialogues with Comenius's Educational Thought

Mari Shiraishi

International Student Course, Toua University  
yamasaki55@toua-u.ac.jp

### Abstract

This paper reports on how Japanese language teachers' attitudes influence learners' growth, examined through the case of one international student (A). While the institutionalization of Japanese language education has advanced with the Registered Japanese Language Teacher system and the Reference Framework, aspects such as teachers' attitudes and perspectives remain difficult to capture.

Drawing on the educational philosophy of Jan Amos Comenius, particularly *Didactica Magna*, this study highlights the importance of teachers' gaze and encouragement in sustaining learners' motivation and self-confidence.

The report demonstrates how educational thought and classroom practice intersect, suggesting that teachers' attitudes complement institutional frameworks and contribute to learners' development as autonomous social beings.

Keywords: Japanese language teachers' attitudes, learners' growth, Comenius,  
Reference Framework for Japanese-Language Education, Autonomy,  
Multicultural symbiotic society,